

すべてのワークフローをファイルベースで実現 未来の映画制作に向けた「画期的な予兆」を実感

映画

「ラストゲーム 最後の早慶戦」

撮影監督：阪本善尚氏

13

2008年8月に全国ロードショー公開された映画「ラストゲーム 最後の早慶戦」（監督：神山征二郎氏）はメモリーカード・カメラレコーダー“P2 cam”「AJ-HPX3000G」で撮影されている。同映画は、東京六大学リーグが中止となり、日本で野球が禁じられた戦時下の1943年が舞台。戦争の激化によって学生たちの徴兵が開始される中、早稲田大学と慶應義塾大学の関係者が、“最後の早慶戦”を行うために尽力する姿が描かれる。

撮影監督は阪本善尚氏。劇中に登場する野球の試合シーンではAJ-HPX3000Gを3台使用した。収録はAVC-Intraによる10bit（1080/24pN）で、撮影素材はHDDへのバックアップとともにBlu-rayディスクでVFXスタジオおよび東映ラボ・テックへと送られた。東映ラボ・テックでは同素材をApple ProRes 422 HDコーデックに変換後、オフライン／オンライン編集を行い、その編集データとVFXスタジオからの合成素材をすべてCineon 10bitで管理、カラーコレクション／フィルムレコーディングを行い、上映用フィルムに仕上げた。

撮影監督を務めた阪本善尚氏（日本映画撮影監督協会）

○ AJ-HPX3000Gは、フルHDで撮影できる素晴らしい使い勝手の良いカメラというのが率直な印象です。画質が格段に進化していて、その差は歴然です。また、AJ-HPX3000Gは解像度が高いため、従来フィルム撮影で行われているディフュージョンなどのフィルターワークをしても問題ない映像が撮れます。

○ 「ラストゲーム」は、戦争映画というよりも戦時下のホームドラマ的な要素が濃い作品。そこからウォームトーンを意識した絵づくりを神山監督と進めました。そこで威力を発揮したのがAG-HPX3000Gが持つ色温度への柔軟性。3200Kと5600Kという定番値に加え、2600K～8000Kの間を27段階という細かさで設定できるので、室内がタングステン光、窓外はデイライトの太陽光という状況でも4000Kにしてタングステン光を少しだけウォームトーンに見せるような工夫が出来ました。フィルムで同様のことをするのは至難の業です。



撮影風景

○ 2002年の「突入せよ!『あさま山荘』事件」でVARICAMを活用した頃から考えると、あっという間に進化した感じがします。テープベースがHDD収録に変わり、それがP2カードという半導体となり、より安定した撮影環境が整えられた。撮影に関するテクノロジーの進化は、この先もどんどん続いていくと思います。今回の「ラストゲーム」では、撮影から仕上げまですべてをファイルベースで進めることが出来ました。そのことによって、効率的なワークフローが可能となり、また新しい試みにも挑戦できました。その意味でも、AJ-HPX3000Gによる「ラストゲーム」は未来の映画制作に向けた「画期的な予兆」を感じた作品といえますね。

○ また、映像トーンも進化を遂げています。VARICAMによってラチチュードが限りなくフィルムに近づいた画が撮れるようになりました。ただし、当時はラボでフィルム化するときに色域を調整していましたが、新しいフラッグシップ機「P2 VARICAM」のAJ-HPX3700Gは、HD SDIデュアルリンク出力時にF-recガンマ映像をCineon 10bitに対応したP-10LOGガンマに変換する機能が備わっている。つまり、他のメーカーが撮影後にポストプロダクションでフィルムのトーンに近づけていくというワークフローを採用しているのに対して、パナソニックはカメラから出力する時点ですでにフィルムトーンにできることを実現したわけです。

○ そして、それはフィルム撮影での最新技術である「デジタル・インターメディアイト」(DI)処理環境に直結できる画期的な記録方式といえます。デジタルのカメラの中で“フィルムにしてい”という感覚であり、まさにデジタルでも銀塩でもない「デジタルフィルム」。作り手の一人として、この考え方をさらに推し進めていきたいと考えています。

